

# 「17年目の秘密」

第9話 「永遠の別れ」

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

谷島 春樹 (17) 中央高校全日制二年生

竹中 倫子 (17) アルバイト

山岸 利枝子 (17) 中央高校全日制二年生

宮田 真由子 (17) 未婚の母

哲男 (48) 父、医者

真実 (0) 娘、赤ん坊

藤原 亮 (17) 中央高校全日制二年生

宣彦 (48) 父、会計事務所所長

佐和 (46) 母、会計事務所副所長

深雪 (15) 妹、中学三年生

川村 浩輔 (17) 中央高校定時制二年生

牧和哉 (17) 滝雀学園高校二年生

貴幸 (48) 父、不動産会社社長

淑子 (45) 母、不動産会社副社長

永井 聡実 (17) 滝雀学園高校二年生

滋郎 (50) 父、会社員

富美代 (50) 継母、専業主婦

松野 明 (31) 中央高校全日制教師

同級生 亜沙美 (17) 中央高校全日制二年生

剛士 (17) 中央高校全日制二年生

飯塚	〃	〃	同級生	〃
純平	美央	香澄	紗耶香	奈々
(25)	(17)	(17)	(17)	(17)
真由子の元彼、会社員	滝雀学園高校二年生	滝雀学園高校二年生	滝雀学園高校二年生	中央高校全日制二年生

1 総合病院・廊下

「手術中」のランプが消える——険しい顔の春樹、利枝子、浩輔、宣彦、佐和、深雪。

手術室のドアが開く——哲男が出てくる。

利枝子「おじさん……」

哲男「名前を聞いたときは驚いたよ。まさか亮君だったとわね」

春樹「(宣彦たちに)こちら、僕たちの友達の宮田真由子さんのお父さんです。ここの病院で先生をしていらっして」

宣彦「そうですか。(と哲男に)亮の父です。

息子がお世話になりました」

佐和「亮の母でございます。息子の様子は？」  
哲男「ここでは何ですから、ご家族の方は、こちらに」

と、哲男に案内されて、去っていく宣彦、佐和、深雪。

残った春樹、利枝子、浩輔。

浩輔「亮、何か重い病気なのかな？」

利枝子「分からない。それは……」

不安な顔の春樹。

## 2 同・カンファレンスルーム

哲男が、レントゲン写真を見せながら、  
宣彦、佐和、深雪に、説明をしている。

哲男「これが、息子さんの脳を表したMRI  
の画像です。真ん中のあたりに、大きな出  
来物が見えるのがお分かりいただけます  
か」

深刻そうな顔をして、MRI画像を見  
る宣彦、佐和、深雪。

宣彦「先生、これは……」

哲男「お察しの通り、これは腫瘍です」

宣彦「……」

佐和「……」

深雪「……」

哲男「申し上げにくいことですが、この脳腫  
瘍は悪性です。息子さんは若いので進行も

早く、腫瘍が大きいです。治療も、生半可なものではありません」

佐和「そんな……」

哲男「それに、検査の結果、小さな細胞でも、体の一部に転移が見られます。このままでは、命がいつまで持つか……」

宣彦「先生……」

深雪「兄は、助からないんですか？」

哲男「例え治療をしたとしても、完治する可能性は低いと思われま……」

佐和「あと、どのくらいの命なんですか？」

哲男「……」

佐和「正直におっしゃってください」

哲男「もってあと、三ヶ月です」

宣彦「……」

深雪「……」

佐和「三ヶ月……」

哲男「息子さんに告知するかは、ご家族で相談なさってください。それと、仲の良い友達にも、どのように報告するかは、お任せ

します」

宣彦「……」

佐和「……」

深雪「……」

哲男「（カルテを見ながら）カルテを見ると、ころによると、息子さんは数ヶ月程前から、ここで診察を受けているようですが、何もご存知なかったのですか？」

宣彦「私たちは、普段自営をしていますが、ずっと家にいるのですが、息子は学校に行った後、友達と会っていたりしているのが多いので、夜に帰ってくるんです。特に、学校であったことや、どこに行ったかも話さないのです……」

哲男「しかし、息子さんの様子がおかしいとか、何か変化には気づかなかったんですか」  
佐和「特に変わった様子は……。身体がだるいとか、体調不良を訴える様子もなかった  
ので……」

哲男「ご家族に心配をかけないように、黙っ

ていたんでしょかね……」

宣彦「亮……。どうして、こんな大事なこと  
黙ってたんだ……。(と激しく落胆すると)  
どうして何も言ってくれなかったんだ……」

佐和「……」

深雪「お兄ちゃんの友達には、何て言うの？」  
宣彦「こんなこと言えるわけがないだろ。亮  
にも、このことは黙るときなさい。本人の  
ためにも、告知しないのが一番なんだから  
な」

黙ってしまふ深雪。

哲男「息子さんが、余命三ヶ月になってしま  
ったことは、誠に残念です。ですが、進行  
を遅らせることはできます。治療の甲斐が  
あれば、余命の三ヶ月より、長く生きられ  
ることもできます。私も一人の医師として、  
一日でも長く命が繋げるように、精一杯の  
ことをさせていただけます。プライベート  
なことが入ってしまいますが、私の娘のこ

とで、息子さんにもいろいろご迷惑をかけた  
ました。最善を尽くします」

宣彦「先生、息子のこと、よろしく願います」

と、深々と哲男に頭を下げる宣彦、佐  
和、深雪。

### 3 中央高校・全景

### 4 同・二年A組教室

春樹と利枝子が、深刻そうな顔で登校  
してくる——既に来ている亜沙美、剛  
士、奈々。

亜沙美「おはよう。何かあったの？」

春樹「実はね、亮君が倒れてさ……」

亜沙美「嘘……」

春樹「しばらく入院するみたい」

剛士「何があったんだよ、亮君に」

利枝子「私たちにもよく……。家族の話では、  
すぐに退院できるだろうなんて言ってる

けど、詳しいことはわからないの……」

奈々「病名とかも、分からないの？」

利枝子「うん」

春樹「詳しいことも聞きたいと思ったから、今週の土曜日、病院に行こうと思って。本

当は今日行きたいんだけど、部活もあるし」

亜沙美「じゃあ、私も行く」

剛士「俺も行くよ。亮君の顔も見たいし」

奈々「私だって、もちろん一緒に行くよ」

利枝子「じゃあ、五人で亮君を元気づけるか」

と、チャイムが鳴り、生徒たちがそれ

ぞれ席に着く——松野が入ってくる。

春樹「起立」

と、立ち上がる生徒たち。

春樹「おはようございます」

生徒たち「おはようございます」

松野「おはようございます」

春樹「着席」

と、席に座る生徒たち。

松野「まずは、皆さんに報告があります。亮

が、しばらく入院することになりました。心配かもしれませんが、ご家族の話では大したことはないそうです。亮も、みんなに迷惑をかけて申し訳ないと言っているそうです。それから……」

と、連絡をしていく。

剛士「(春樹に)なあ、迷惑かけたなんて言ってるけど、どうせ誰か見舞いに来るだろうって思ってるんじゃない」

春樹「亮君なら、あり得るね(と笑う)」

## 5 藤原会計事務所・事務室

宣彦と佐和、その他事務員が数人、仕事をしている。

宣彦「(事務員たちに)そろそろ昼休みに入ってください。午後からもよろしくお願いします」

事務員たち「はい」

と、荷物をまとめ始める。

事務員A「では、お昼行ってきます」

その他の事務員たち「行ってきます」

と、出ていく。

宣彦「（佐和に）お前も、昼休みなんだ。亮の様子見てきたらどうだ」

溜息をつく佐和。

宣彦「佐和……」

佐和「私、正直亮の顔見るのが辛い。亮と一緒にいると、いつも口論みたいになっちゃやし、その勢いで余命のことも言っちゃいそうな気がして怖いの」

宣彦「……」

佐和「でも、辛いなんて言うてはいられないわよね。一番辛いのは亮なんだから」

宣彦「そうだよな。病気の状態を理解してないあいつが、一番辛いんだよな……。余命宣告のことは辛い、俺たちも、この難関を乗り切ろう。亮のためにも、俺たちがしっかりして、亮の辛さをカバーしてやらないと……」

佐和、ハンカチを取り出して、目を押

さえると、

佐和「私だって、この難関を乗り越えななきゃいけないことぐらい分かってるわよ。でも、自分で自分をコントロールできないのよ。もう、どうしたら良いのよ、私……」

と、机に顔を伏せる。

険しい顔をしている宣彦。

タイトル

『第9話 永遠の別れ』

## 6 総合病院・亮の部屋

亮の見舞いに来ている春樹、利枝子、

亜沙美、剛士、奈々。

亮「悪かったな、心配かけて」

亜沙美「元気そうで安心した。ここ一週間の春樹と利枝子なんて、すごい難しい顔してたから、てっきり意識が戻らない、重い病気なのかと思っちゃって」

春樹「だって、突然俺の目の前で倒れたんだ

よ。不安になるのは当然でしょ」

利枝子「そうだよ」

剛士「それで、病名はなんだって？」

亮「それが、脳震盪らしい」

奈々「脳震盪？」

亮「立ち上がった瞬間に立ちくらみがして、そのまま倒れて頭打ったからさ。それで気を失ったみたいなんだよ。だから、検査で少し入院するだけみたい」

春樹「だからあの時、声かけても反応しなかったんだ。もう、びつくりしたあ……。本当に、亮君がこのまま助からないんじゃないかと思うたんだから……」

利枝子「でも良かった。入院が長引かなくて済むみたいで。もう、心配かけさせないでよね」

亮「悪いな。でも、もう心配はいらないよ。俺はこの通り、元気だから」

春樹「なら安心した」

亮、頭痛がするようで、険しい顔で頭

に手を当てる。

剛士「大丈夫か？」

一同、不安そうに亮を見る。

亮「まだ完治してないからな。たまに、頭痛がすることがあるんだよ」

春樹「そっか……。頑張つて、早く完治してね」

亮「ああ」

不安な顔の利枝子。

## 7 牧家・居間（夜）

和哉が帰宅する。

和哉「ただいま」

と、淑子が見迎える。

淑子「お帰り」

和哉「風呂入ってくる」

淑子「和哉ッ」

と、呼び止めると、書類を差し出す。

淑子「これ、書いて？」

和哉「何これ？」

淑子「パスポートの申請書よ」

和哉「海外旅行でも行くの？」

淑子「実はね、和哉……」

和哉「……？」

淑子「お父さんの会社、アメリカの大きな企業に吸収合併されることが決まったですよ。だから、私たちも家族で、アメリカに行くことになったの」

和哉「え……？」

淑子「早く書いてね。それと、荷物も早いうちにまとめてちょうだい。頼んだわよ」

と、出ていく。

ただ唾然としている和哉である。

## 8 滝雀学園高校・校門前

和哉が登校してくる——元気がない様子である。

と、聡実の音がする。

聡実の声「和哉君ッ」

振り向く和哉。

聡実が、笑顔で手を振りながら、やってくる。

聡実 「おはよう。和哉君ッ」

和哉 「（笑顔を作って）ああ、おはよう」

と、聡実の手を握る。

笑顔になる聡実——寄り添うように、二人で歩いていく。

## 9 牧家・和哉の部屋

和哉が、聡実を伴って帰宅する。

聡実 「ねえ、今日何かあった？」

和哉 「どうして？」

聡実 「何だか、今日の和哉君、元気がないよ  
うに見えたから……」

和哉 「……」

聡実 「和哉君……？」

和哉 「何にもないよ。ただ、ちよつと疲れて  
るだけだ」

聡実 「そう……。なら良かったけど」

和哉 「心配してくれてたのか？」

聡実「当たり前じゃん。私は、和哉の恋人なんだから」

和哉「聡実……」

と、聡実を抱きしめる。

聡実「和哉君……」

と、お互い顔を見つめあい、キスをすると、そのままベッドに横たわる。

## 10 街

和哉と聡実が、手をつないで歩いている。

と、後を追ってきた香澄と美央が、若い不良を数人引き連れて、立ち止まる。

香澄「あの男よ。後のこと、頼んだよ」

不良たち、香澄にうなずくと、ゆっくりと和哉と聡実の後を追う。

不良A「(和哉たちに)お兄さんたち、ちょっと良い?」

と、振り向く和哉と聡実。

不良A「(和哉と聡実の肩を組むと)ちよっ

と来てもらおうか」

## 11 廃工場

不良たちに、殴られたり蹴られたりしている和哉。

聡実、和哉を助けようとするが、不良Bに羽交い絞めにされて、動けないでいる。

聡実「和哉君ッ……。(と不良Bに) いやッ……離してよッ……」

不良B「せいぜい、彼氏が力尽きるの見届けろ」

聡実「いやッ……。和哉君ッ……」

和哉「聡実……」

と、殴られる和哉。

聡実、不良Bの腕をかみつく。

不良B「痛ってえッ」

聡実、和哉の元に行くと、不良たちを突き飛ばしていく。

聡実「これ以上、和哉君に変なことしないで」

不良A「うるせえよ」

と、聡実の頬を引っぱたき、突き飛ばすと、聡実の腹部を蹴る。

聡実、むせながらも、和哉をかばうようにかぶさる。

聡実「もう気が済んだでしょ、ここまでやれば。もう、どうしてこんなことするの……」

和哉「聡実……お前だけでも逃げろ」

聡実「いやッ。和哉君を置いて逃げれない」  
やつと暴力を止める不良たち。

不良A「まあ、ここまでやれば十分だろ。(と仲間たちに)おい、帰るぞ」

と、去っていく不良たち。  
和哉、ゆっくりと体を起こす。

聡実「ねえ、大丈夫？」

和哉「俺は、何とか……。 (と痛みがあるらしく) あッ……」

と、腹部に手を当てる。

聡実「救急車、呼ぶ？ 病院、行ったほうが  
良いよ」

和哉「大丈夫だ。自分で行けるよ。それより、

お前も……」

聡実「私のことなら、大丈夫……」

和哉「聡実……」

聡実「和哉君、死んじゃうんじゃないかって  
思った……。何とかして、守りたかったか  
ら……」

和哉「俺も、聡実を守ってやらなきゃって思  
ってたのに、結局できなかった……。ごめ  
ん、守ってやれなくて……」

聡実「良いの。無事だったら、それで……」

和哉「聡実……」

と、聡実を強く抱きしめる——それに  
応えるように、手を回す聡実。

## 12 道（一週間後）

聡実が、難しい顔をして歩いている。

## 13 牧家・玄関

聡実がやってくる——インターホンを

鳴らそうとしているが、ためらっているようで、おずおずしている。

と、玄関から貴幸と淑子が、出かける支度をして出てくる。

淑子、聡実をジロリと見ると、

淑子「あなたね。うちの和哉を酷い目に合わせたのは」

聡実「おはようございます。和哉君の様子は、いかがですか？」

淑子「（イライラして）いかかも何もないでしょう。あんな酷い目に遭って、一週間も自宅療養になったんですよ。これから、アメリカに行かなきゃいけないのに、こんな苦勞させられて、和哉も可哀想ですよ」

聡実「アメリカ……ですか……？」

淑子「あら、何にもご存知ないの？（と貴幸に）あなた、説明してあげてください」

貴幸「実は、うちの会社、アメリカの企業に合併されることが決まったんだよ。それで、家族と一緒にアメリカに行くことが決ま

つたんだよ」

聡実「そうですか……」

淑子「和哉が何にも言わなかったってことは、それだけの付き合いだったとしか思っ  
てなかつたんでしょ、和哉は」

聡実「……」

淑子「（貴幸に）あなた、もう行きますよ。

いつまでも、こんなところで油売ってる暇  
はないんですからね」

と、そそくさと立ち去っていく。

貴幸「ゆっくり、和哉の側にいてあげてくれ。

それが、今の和哉には一番の薬だからね」

聡実「はい……」

貴幸「ごゆっくり（と出ていく）」

呆然と立ち尽くしている聡実——ため  
らうように帰ろうとすると、勢いよく  
ドアが開き、和哉が出てくる。

和哉「聡実ッ」

聡実「和哉君……」

14 同・和哉の部屋

和哉と聡実が話している。

和哉「そつか。うちの会社が合併されたこと、

知ってたんだ……」

聡実「うん……新聞で見たの。でも、和哉君

は何にも言わなかったし、多分言いづらい

んだろうなって思ってたから、私も何にも

言わなかったの」

和哉「悪かったな、かえって気を遣わせちゃ

って……」

聡実「良いの。だって、会社がどうなるうが、

私には関係のないことだもん。でも……ア

メリカに行くことだけは、話してほしかっ

た……」

和哉「ごめん……隠すつもりはなかったんだ」

聡実「分かってる……。それは、分かっている

よ」

和哉「言わなきゃとは思ってたんだよ。でも、

言えなかったんだ。言ったら、聡実だって

悲しむと思ったし、俺も辛かったから……」

聡実「和哉君の気持ちは、分かってるよ。私だって、和哉君と同じ立場だったら、絶対に言えないもん」

和哉「聡実……」

と、後ろから聡実を抱きしめる。

聡実「（静かに拒んで）和哉君……」

と、ゆっくりと体を離す。

和哉「……」

やりきれない顔の聡実である。

## 15 藤原会計事務所・事務室

深雪が母屋から出てくると、受話器を持って、電話をかける。

深雪「もしもし、春樹先輩？ 深雪です、おはようございます。実は、兄の検査入院の結果が出たんですけど、異常が見つかったみたいで、入院が長引いたんです。春樹先輩には伝えておいたほうが良いと思って。はい……はい、ありがとうございます。では」

と、電話を切る——大きな溜息をつく。

16 アパート・谷島家・居間

携帯電話を切る春樹——洗濯物をたたんでいる倫子。

倫子「亮君、入院長引いたの？」

春樹「うん。検査の結果に、異常が見つかったらしくて」

倫子「大丈夫なのかな？」

春樹「やっぱり、何か重い病気なのかな……」

倫子「そんなネガティブになってどうするの」

春樹「ダメだね、亮君に怒られちゃう」

倫子「そうだよ」

と、インターホンが鳴る。

倫子「私、出るわ」

と、出ていく。

春樹、たたんだ洗濯物をダンスにしま  
い始める。

倫子の声「どうしたの、聡実。その怪我」  
いぶかしそうに、玄関を見る春樹。

倫子の声「ま、とにかくあがつて」

春樹「（玄関に向かつて）何かあったの？」

と、倫子が聡実を連れて入ってくる。

春樹「聡美……何があつたの一体……」

聡実「ちよつと、転んだの」

春樹「転んだだけで、そんな怪我しないでし

よ」

聡実「……私、和哉君と別れたの」

春樹「え……？」

倫子「どうして？」

聡実「私と一緒にいると、和哉君は不幸になるの。だから、別れたの」

倫子「聡実から切り出したの？」

聡実「うん……」

春樹「学校で、何かあつたんでしょ？ その

怪我だって……。そうじゃなかったら、別れるはずがないんだから」

聡実「和哉君と付き合つたことで、友達に裏切られて、いじめはエスカレートして、とうとう男たちに襲われた……」

春樹「それが、別れようって思った理由？」

聡実「うん……。和哉君には、本当によくしてもらった。私を女にしてくれたのも和哉君だったし、いじめから守ってくれて、学校でも和哉君がいてくれたから、これまでやってこれたの。でも、問題がここままでになった以上、もう一緒にはいられないんだよ。私は、この程度で済んだけど、和哉君は結構暴力振るわれて、一週間自宅療養になったんだから」

倫子「暴力事件も、聡実をいじめてる子たちの仕業なの？」

聡実「首謀者は、大体の見当はついてるから。それに、和哉君がアメリカに行くことが分かったから、逆にこの事件をきっかけにして、別れようって決心がついたの」

春樹「え……。和哉が、アメリカに行くってどういうこと？」

倫子「私たち、何にも聞いてないよ」

聡実「やっぱり、和哉君話してなかったんだ。

私も、和哉君のお父さんとお母さんから聞いた話なの」

春樹「もしかして、例の合併の話が影響してるの？」

聡実「そう。会社の合併も、和哉君は最後まで言ってくれなかった。昨日和哉君の家に行ったとき、お父さんから合併の話を聞かされて、お母さんから家族揃ってアメリカに行くことを聞かされたの」

春樹「そんなことになってたんだ……」

倫子「……」

聡実「向こうもホッとしてると思うよ。私から別れを告げて」

春樹「和哉は、そんな無責任な男じゃないッ。ずっと、聡実のことを守りたいって思ってる。どうしてその和哉の気持ちに分からないのッ」

聡実「本当は分かってるわよッ。(と泣き出して)私だって、本当は和哉君と別れたくなんてなかった。でも、犠牲を最小限に抑

えるには、こうするしかないの。(と春樹を睨んで)春樹には、私の気持ちなんて分からないよッ」

黙ってしまおう春樹。

倫子「(冷静に)聡実、少しは落ち着きなよ。

ね……」

涙をふき取る聡実。

春樹「(苛立つように)亮君の入院は長引くし、聡実とは別れるし、和哉はアメリカに行っちゃうし……。もう、みんなどうしてこんなことになっちゃうんだろう……」

春樹も、倫子も、聡実も、険しい顔をしている。

## 17 総合病院・全景

## 18 同・亮の病室

亮が、ぼんやりと窓から見える青空を眺めている――側で付き添っている深雪が、林檎の皮を剥いている。

亮「なあ、深雪」

深雪「何？」

亮「俺、重い病気なのかな」

深雪「……どうして、そう思うの？」

亮「何か、どんどん俺の体が違うような気が

するんだ。体はだるくなる一方だし、頭痛

は激しくなるし、めまいもひどくなってる」

深雪「（笑って）お兄ちゃんは、心配しすぎ

だって。治療をすれば、すぐに退院できる」

亮「そうかな……」

不安な顔の深雪。

19 マンション・川村家・居間

靖司が、食器を洗っている。

と、浩輔が帰宅する。

浩輔「ただいま」

靖司「お帰り。謙輔、今風呂入ってるから、

先に飯食つとけ」

浩輔「ああ」

と、靖司の隣に来て、手を洗います。

靖司「なあ、浩輔」

浩輔「何？」

靖司「そろそろ、母さんの退院が決まりそう

なんだ」

浩輔「（興味なさげに）そう」

靖司「退院の日は、家族で迎えに行つてあげ

ような」

浩輔、黙ったまま手をふくと、食卓の

椅子に座り、

浩輔「いただきます」

と、夕飯を食べ始める。

やりきれないような顔で、浩輔の後ろ

姿を見つめる靖司。

## 20 大学病院・愛子の病室

謙輔が、病室の片づけをしている。

と、靖司と愛子が戻ってくる。

靖司「退院の手続き、終わったよ」

愛子「やっぱり、浩輔は来てないわよね」

靖司「愛子」

愛子「何？」

靖司「浩輔は来ないかもしれないが、完治したら、必ずお前に言いたいことがあったんだ」

愛子「……？」

靖司「愛子、よく……」

と、ドアが開いて、浩輔が入ってくる  
と、

浩輔「よく頑張ったな、だろ」

一同、振り向いて、

靖司と謙輔「浩輔……」

浩輔「悪かったな、遅くなって」

愛子「浩輔……」

浩輔「本当は、来ないつもりだった。でも、来なきゃいけないって思ったんだ」

愛子「浩輔。母さんね……」

浩輔「良いよ、もう」

愛子「……」

浩輔「酒の勢いで本音が出たと思って、それが本心かどうか、定かじゃないって、自

分に言い聞かせとけば、それで済むことだから」

愛子「でも、あんた少しも心配してるような様子じゃなかったし、見舞いだって、ほとんど……」

浩輔「そっちのほうが良いと思ったんだよ。あまり行くとうるさく言われるし、かえって黙って見守っていたほうが、母さんのためにも良いと思ったから」

愛子「浩輔……」

浩輔「元気になって良かったよ。俺も安心した」

愛子「浩輔……（と目から涙がこぼれる）」  
靖司「よし、そろそろ出るか。あまり長居するわけにもいかないだろ」

愛子「そうね。じゃ、行きましょう」  
と、荷物を持って出ていく靖司と愛子。  
浩輔も出て行こうとすると、

謙輔「浩輔」

振り返る浩輔——手帳を渡す謙輔。

浩輔「これは？」

謙輔「帰ったら、読め」

と、先に出て行く。

いぶかしそうに、手帳を眺める浩輔。

21 マンション・川村家・浩輔の部屋

ベッドで寝転がっている浩輔――机の上  
上に置いてある手帳を手にすると、そ  
れを開く。

愛子が付けていた日記が記されている  
――読み始める浩輔。

愛子の声「八月五日。今日から、入院するこ  
とが決まった。アルコールは、私を散々蝕  
んできた。どれぐらいにかかるかは分から  
ないけれど、せめてもう一度家族の中の笑  
顔を取り戻せるまでにはしたい」

と、日記を数ページめくる浩輔。

愛子の声「九月六日。今日は、浩輔が見舞い  
に来てくれたらしい。眠つてるときだった  
から、顔を見れなかったのが残念。次はい

つ来るんだらうか。それを楽しみにして、  
また治療に専念しようと思う」

と、また日記を数ページめくる浩輔。

愛子の声「十月二十日。やっと、今日退院する  
ことができる。この二カ月半の間に、浩  
輔はたった一度しか姿を見せてはくれな  
かった。しかも、私が眠っているときだっ  
た。あの子が、この病院を見つけてくれた  
と言っても、直接あの子の顔を二カ月半も  
見ていない。今日も来る気配はなさそう。  
やはりあの子は、私を軽蔑しているのだろ  
うか」

感極まって、ゆっくり手帳を閉じる浩  
輔。

22 同・同・居間

浩輔が、手帳を持って自室から出てく  
る——台所で、愛子が処方箋を飲んで  
いる。

愛子「あら。まだ起きてたの？」

浩輔「母さん、これ……」

と、手帳を見せる。

愛子「お兄ちゃんでしょ、これ見せたの」

浩輔「ああ。母さんの気持ち、これで分かっ

たから」

愛子「退院の時、失くしたと思って、慌てて

たのよ。まさかお兄ちゃんが、浩輔に渡し

てたなんてねえ」

浩輔「母さん」

愛子「何？」

浩輔「よく頑張ったな。二カ月半」

愛子「ありがとう、浩輔。母さんのために、

あの病院を見つけてくれて」

浩輔「母さん……」

笑い合う浩輔と愛子。

## 23 総合病院・全景

## 24 同・亮の病室く廊下

亮が、放心状態のようにボーっとして、

右手を見ている。

と、ドアをノックする音が聞こえ、深雪に伴われて、春樹が入ってくる。

深雪「お兄ちゃん。お見舞いに来てくれたよ」

春樹「亮君。病気の方は、どう？」

だが、何も答えない亮。

深雪「お兄ちゃん、どうしたの？ 具合でも

悪いの」

春樹「亮君。今日はね、亮君のためになるもの持ってきたよ」

と、鞆からプリントの束を出す。

春樹「これ、授業用ノートのコピー。松野先生にお願いして、全教科、亮君が休んでた分、全部コピーしてもらったの。勉強嫌いな亮君でも、これからは逃げられないよ。だって、勉強しないと、テストの点だっってもらえないんだよ。亮君は入院してるから好きなことはできないかもしれないけど、その間に、勉強をしつかりとしとかないなね」

深雪「そうだよ。先輩は、お兄ちゃんのことをちゃんと心配してくれてるんだからね。退院した後でも、お兄ちゃんがちゃんと勉強についてこれるように、ここまでやってくれるんだから。幸せ者だよ、お兄ちゃん。は。良い友達を持って」

亮、春樹の方に振り向く。

笑顔で亮を見る春樹。

亮「あの……誰でしたっけ？」

春樹「！」

深雪「お兄ちゃん……？」

春樹「亮君……」

深雪「（亮に）お兄ちゃん、何言ってるの？」

春樹先輩でしょ、小学校から同級生だった、

谷島春樹先輩でしょ」

亮「ああ……春樹君ね。今日は来てくれて、ありがとうございます」

春樹、耐えられず、飛び出していく。

深雪「春樹先輩……」

と、後を追いかける。

廊下で、呆然と立っている春樹。

深雪「春樹先輩……」

動揺を隠せず、激しく落胆している春樹である。

25 中央高校・職員室（翌）

春樹と松野が話している。

松野「俺も、なかなか亮の様子を見に行けないんだが、亮、そんなに悪いのか？」

春樹「それが、誰が見舞いに行っても、今の亮君にはその相手が誰か認識できてないんです」

松野「どういうことだ？」

春樹「亮君は……亮君は、同級生である僕や利枝子が、誰であるかがもう分からないくらいになってるんです。右手も、もう使えないみたいで……」

松野「……」

26 マンション・飯塚家・リビング（夜）

まどかが、夕飯の支度をしている――

玩具で遊んでいる光平。

と、純平が、深刻な顔で帰宅する。

純平「ただいま……」

まどか「お帰りなさい」

光平「パパ、お帰りなさい」

と、純平に抱きつく。

まどか「(純平に) もう少しで、ご飯できるから」

光平「(純平に) パパ、遊ぼう」

純平「ちよつとママと大事なお話があるから、それが終わったらな」

光平「はい」

と、再び玩具で遊び始める光平。

まどか「大事な話って、何？」

純平「夕方、おふくろから電話があった」

まどか「福井のお姑さんから？」

純平「親父が倒れたらしい。明日、様子を見るに、福井に行ってくる」

まどか「お舅さんが……」

純平「人手が足りないみたいで、このままだと「飯塚酒造」も危ないんだ。そろそろ、俺が帰るときが来たのかもしれない」

まどか「純平……」

純平「俺は、「飯塚酒造」の一人息子だ。いずれは、親の跡を継がなければいけないって覚悟はしてたんだ」

まどか「確かに、光平は私を捨てた男との子どもだから、子連れの私との結婚に、純平のご両親は随分反対なさった。でも、ちゃんと純平の奥さんになって、いずれは酒屋の女将さんになる覚悟はできてるから」

何かを考え始めている純平。

まどか「今、あの女の事考えてたでしょ」

純平「……」

まどか「良い機会じゃない。これで、あの女とも縁が切れるんだから。お互いのためにも、これで良かったのよ。さて、ご飯にしよう。(と光平に) 光平、ご飯よ」

光平「はい」

と、テーブルに夕飯の器を並べ始める。  
険しい顔で、まどかを見る純平である。

27 山岸家・利枝子の部屋

利枝子がベッドに寝転がって、携帯電話  
話をいじっている――携帯電話のカメラ  
ラで撮った写真を見ている。

学校生活の様子を収めた写真が多く、  
春樹や亮、亜沙美、剛士、奈々、その  
他のクラスメイト、松野などの写真が  
何枚も保存されている。

何枚も見えていくと、亮が笑顔でカメラ  
目線でポーズを取っている写真が何枚  
も出てくる。

寂しそうな顔で、写真を見つめている  
利枝子。

28 藤原会計事務所・事務室

宣彦、佐和、その他事務員たちが、仕  
事をしている。

と、深雪が帰ってくる。

深雪「ただいま」

事務員たち「お帰りなさい」

宣彦「お帰り」

佐和「お帰り。今日、この後病院行くんですし

よ？」

深雪「うん、もちろん」

と、電話が鳴る。

宣彦「（受話器を取り）はい、藤原会計事務

所です。はい……えッ……分かりました、

すぐに行きます」

と、受話器を戻す。

宣彦「（佐和と深雪に）亮の容態が、急変し

たそうだ」

佐和と深雪「えッ……」

## 29 病院・手術室前の廊下

春樹、利枝子、真実を寝かせている真

由子、宣彦、佐和、深雪が待っている。

と、"手術中"のランプが消えると、

ドアが開き、手術用の衣服を着た哲男  
が出てくる。

宣彦「先生……」

真由子「お父さん……」

哲男「……最善は尽くしましたが、残念です  
……」

ハツとなる一同——真実が泣き出す。

真由子「お父さん……」

佐和、その場に崩れて、号泣する。

深雪「お兄ちゃん……」

と、手術室に駆け込んでいく。

宣彦「深雪……」

と、慌てて後を追いかける。

魂が抜けたように、ただ呆然と立ち尽  
くしている春樹、その場を去っていく

春樹。

利枝子「春樹……？」

と、後を追っていく。

利枝子が入ってくる——春樹が、呆然とベッドに手を当てている。

利枝子「春樹……」

春樹「さつきまで、亮君、ここにいたんだよね」

利枝子「……」

春樹「（めそめそと泣き始めると）どうして……どうして、亮君が死ななきやいけなかつたんだろう……」

利枝子「……」

利枝子も、目から涙が零れ落ちると、慌ててそれを手で拭う。

春樹「ちゃんと退院できたら、また一緒に授業受けたかったのに……。それももうできないんだよね……」

利枝子「……」

春樹「亮君……亮君ッ……」

と、号泣すると、ベッドに顔をうずめる。

利枝子、いたたまれないように春樹を

見つめると、優しく背中を摩る。  
いつまでも泣いている春樹である。

31 同・霊安室

倫子が慌てて入ってくる。  
亮の遺体を囲むように、ただ呆然と宣彦、佐和、深雪が亮の死に顔を見ている。  
倫子、亮の死に顔を見ると、愕然とその場に崩れて、泣き出す。

倫子「亮君……」

と、ドアが開き、和哉と聡実が駆けつける。

聡実、亮の死に顔を見ると、涙が溢れてくる。

和哉、聡実の肩を優しく抱くが、その目には涙が浮かんでいる。

32 同・霊安室前の廊下

利枝子が、涙を拭いている。

真由子は、真実を優しく抱きしめながらも、目から涙が零れ落ちている。  
浩輔は、呆然と立ち尽くしている。

33 同・亮の病室

無表情のまま、ベッドを見つめている  
春樹。

34 葬儀会場・表

利枝子、真実を抱えた真由子、浩輔、  
和哉、聡実が待っている。  
と、倫子がやってくる。

利枝子「ねえ。春樹は？」

倫子「亮君と別れたくないからって……」

和哉「春樹ったら、一体何考えてるんだよ。  
今日来なかったら、もう二度と、亮君の顔  
は見れないって言うのに……」

倫子「仕方ないよ……。あの二人の友情は、  
特別だったんだもん……」

黙ってしまう一同——険しい顔の倫子

である。

35 アパート・谷島家・居間

春樹が、平常心を保ったような冷静な顔で、食器を洗っている――食器を片付けようとする、皿が上手く片付かなかつたらしく、その場に落ちて割れてしまう。

うんざりしたような顔でしゃがむと、食器の破片を片付ける春樹――ふと手を止めると、脳裏に亮との思い出が蘇る。

36 中央高校・二年A組教室（春樹の回想）

亮が駆け込んでくる――見迎える春樹、利枝子、亜沙美、剛士、奈々。

亮「ギリギリセーフだな」

春樹「もっと余裕持って家出てきなよ」

37 同・昇降口（同）

春樹が登校してくる——亮の声が聞こえてくる。

亮の声「春樹ッ」

振り向く春樹。

階段の手すりを滑ってくる亮。

亮「おはよう」

春樹「おはよう」

38 アパート・谷島家・居間（同）

春樹と亮が勉強をしている。

亮「なあ、これ何て読むんだよ」

春樹「どれ？」

亮「この英語」

春樹「亮君、こんなのも読めないの」

亮「おッ、馬鹿にしたな」

39 同場所（回想戻り）

泣きながら、皿の破片を拾っている春

樹——皿の破片を一片拾うと、悔しそ

うな顔をして強く握る。

春樹の掌から、血が流れ出す。

40 葬儀会場・表

亮の棺を乗せた霊柩車が、出発していく。

いつまでも見送る倫子、真実を抱えた真由子、浩輔、和哉、聡実、松野、利枝子、亜沙美、剛士、奈々、その他二年A組の生徒などの弔問客。

それぞれ目に涙を浮かべる者、呆然と立ち尽くしている者などが見受けられる。

41 アパート・谷島家・居間

倫子が帰宅する。

倫子「ただいま。(と春樹を見ると)春樹、どうしたの？」

呆然と台所でしゃがみもたれている春樹の掌から出ている血が、床を汚している。

何も答えない春樹。

倫子「何したの、春樹……」

春樹「……」

倫子「ねえ。どうしちゃったの、春樹……」

春樹「倫子」

倫子「何？」

春樹「亮君、どうだった？」

倫子「安らかな死に顔って、ああいうのを言

うんだろうね……」

春樹「そう……」

42 宮田家・リビング（夜）

真由子が、洗濯物を畳んでいる——新聞を読んでいる哲男。

哲男「大切な友達、助けられなくて、ごめん

な……」

真由子「亮君は、余命宣告を受けたぐらい、重い病気だったんだもん。例え医者でも、

救えない命だってあるんだから」

哲男「惜しい子を亡くしたな……」

真由子「……」

哲男「亮君も、真由子のことを大事に思っていてくれてたもんな。十七歳なんて、一番いろいろやりたいたいことがある年頃だって言うのに……。本当に残念だ」

真由子「医学には限界があるんだもん。お父さんが、そんな風に考え込むことなんてないよ。私は、大丈夫だから。最後まで、亮君のために尽くしてくれて、ありがとう……」

やりきれない顔で、黙ってしまう哲男。

43 同・表（夜）

夏希がやってくる。

44 同・同・居間

布団で横になっっている春樹に、倫子と

夏希が話しかけている。

夏希「ハルらしくないじゃん。もつと元気出しなよ」

春樹「何。今更、馬鹿にしに来たの。散々嫌味を言ってきた弟への当てつけ？」

倫子「春樹……。夏希ちゃん、私が連絡したら、すぐに来てくれたんだよ。ちゃんと、春樹のことを心配して……」

春樹「(遮って) 弟を裏切るような人が、心配してくれるわけないでしょ。無断で仕事を辞めて、キャバクラで働いてたような性根持ってるんだもん、ろくなことないよ……」

夏希「確かに、キャバクラは高収入な分、嫌な接待もしたよ。ハルが、良い顔をしないことなんて、百も承知だった。でもね、キャバクラで働いてると、いろんな人と出会えて勉強にもなったんだよ」

春樹「何が勉強だよ。醜い世界を見せつけられてるだけでしょ」

夏希「そんなんじゃないの。私、今月一杯でお店辞めるの」

倫子「夏希ちゃん、辞めるって、新しい仕事、

見つかったの？」

夏希「うん。お店のお客さんで、WEBペー  
ジ制作を中心としているデザイン事務所  
の社長さんがいてね、私たちの家庭事情な  
んかを話したら、じゃあ是非働かないかっ  
て、声かけてくださったの。再スタートで  
きる、良いチャンスだと思って、快く引き  
受けたの」

春樹「姉ちゃん……。本気で、その新しいと  
ころで働くつもりで……」

夏希「ごめんね。ずっと、ハルに迷惑かけて。  
でも、もう大丈夫。正直、もうキャバクラ  
には限界を感じてたの。最初の頃は楽しか  
ったけど、ああいうところでは、醜い争い  
があつて、うんざりしてたの。でも、キャ  
バクラで働いたことで、その社長さんとも  
出会えたわけだし、無駄じゃなかったって  
思ってるの」

春樹「じゃあ、本気で再スタートするつもり  
になったの？」

夏希「うん。これで、少しはハルの気持ちも少しは変わると思ったし、また、ここに戻ってくるつもりにもなったの。それに、前に聞いたけど、倫子ちゃんだって、ここ出て行って、〃ひまわり園〃で働くって言ってたし。ハルを支えられるのは、やっぱり私なんだって、改めて考えさせられた」

倫子「そのことなんだけどね……」

春樹「倫子……？」

倫子「私、このまま〃ひまわり園〃で働くつもりだったけど……春樹を放ったまま出てくなんて、出来ない……」

春樹「倫子……」

倫子「私が離婚して、住むところが無くなったとき、春樹は、一緒に新しい家を探すどころか、ここに来たら良いつて言ってくれた。私が、今こうして生きてられるのは、春樹がいたからなの」

春樹「……」

倫子「それなのに私は、早く自立しなきゃと

思っ、ここを出て行くことしか考えてな  
かった。でも、そんなことしたら罰が当た  
るよね。春樹が私を支えてくれたからこそ、  
今度は私が、春樹を支えなきゃって……。  
だから、ここに残ることに決めたの」

春樹「俺、倫子に何かをしてもらうために、  
ここに住まわせたんじゃないんだよ」

倫子「それは分かってる。ただ、私の気が済  
まないから。だから私、考えたの。昼間は  
“ひまわり園”で働いて、夜には春樹や夏  
希ちゃんのいる、ここに帰って三人で暮ら  
すのが良いんじゃないかって。私が、今一  
番すべきことは、春樹を支えることだと思  
うの」

春樹「……」

夏希「ハル、良いじゃない。このまま、倫子  
ちゃんにいてもらえば。また、昔みたいに、  
仲良く私たち、一緒に生活できるんだから」

春樹「姉ちゃん……」

夏希「ハル、ごめんね。これまで、私のせい

で、嫌な思いさせて」

倫子「春樹。私たち、亮君の分まで生きなきやね。この命ある限りは、無駄なく、人生を贅沢に楽しく生きなきゃ、亮君に申し訳ないよ」

春樹「亮君のためにも、俺たち、まだまだこれから、頑張らないとなッ」

倫子たちに笑顔を見せる春樹。

#### 45 公園（夜）

ベンチに座って、聡実と和哉が話している。

和哉「なあ聡実」

聡実「……？」

和哉「俺たち、もう一度やり直そう」

聡実「和哉君……」

和哉「俺は本気だ。決心もついでる」

驚いて、啞然としている聡実である。

つづく